

戦争を経験していないわたしたちにできることは？

6年 社会科

I 実践の目指しているもの

本単元において、社会の変化に伴う「国民生活」を単元の核として進めていく。前の単元においても「明治維新の国民生活」、「日進日露戦争後の国民生活」を追究の「財産」として捉えている子どもたち。本単元では、「戦時中の国民生活」「戦後の国民生活」、そして「経済発展を果たした頃の国民生活」と時代を追うごとにその変遷を捉えさせていく。そうすることで、「自分だったら…」「前は～だったけど…」などと、比較・関連しやすくなり、自分事として考えやすくなる。また、「今と比べると…」などと現在の日常生活と比較して考える姿が期待でき、今では想像もできないほどの戦時中、戦後の生活に驚き、興味・関心をもって学習を進めていくことができると思う。さらに、「札幌の街の様子」「札幌市民の声」など、自分たちの住んでいる地域の戦時中の様子に関連させることで、戦争と自分との距離をより縮めていく。そのために「札幌市平和バーチャル資料館」や「札幌市民の戦争体験談」を単元の中で活用する。当時の札幌市民の生活全般の様子（衣食住）や子どもたちの学校生活の様子など、当時の人の生の声を通して知ることで、追究の「財産」を増やし、戦時中や戦後の生活への興味をより高めていくことに違いない。

このような学習を構成することで、「戦争はしてはだめ」「平和は大切」という平易な考え方から根拠をもった確かな見方・考え方へと高めていきたい。「戦争は人の心まで支配するものだから2度と起こしてはならない」「戦争は当たり前日常を奪うものなので、平和な世の中を自分たちが維持していこう」。こうした子どもたちの見方・考え方の変容を目指して授業を構築していく。

II 研究の内容

1 題材名（単元名）

「戦争から平和へ」

2 題材の目標（単元の目標）

- ・戦争中や戦後の国民生活やアジアの人々の生活に関心をもち、意欲的に調べようとしている。
(関心・意欲・態度)
- ・戦争と国民やアジアの人々の暮らしの関連を考え、適切に表現している。(思考・判断・表現)
- ・資料やから戦時中、戦後の国民生活について必要な情報を調べ、読み取っている。(技能)
- ・国民が戦争で大きな被害を受けたこと、戦後は民主的な国家として出発し、国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことを理解している。(知識・理解)

3 題材の指導計画（12時間扱い）・単元構成など

本単元は、小学校における歴史学習の最終単元。1931年の満州事変から1945年の第2次世界大戦終結までの15年にわたる戦争を扱う単元である。また敗戦後、民主主義のもと国際社会へ復帰し、経済発展していく日本の社会の変化について学んでいく。

第1次「戦争と人々の暮らし」。戦争が激しくなる中で国民生活や子どもの暮らしについて学習していく。比較的被害の少ない札幌市の戦時中の暮らしと比較することで、日本全体が戦争一色の暮らしを強いられていったことを捉えさせていく。第2次「平和で豊かな暮らしを目指して」。厳しい生活の中にも希望の光が見えた戦後。憲法の3つの柱を基本として、国際社会へ復帰し、産業が発展する中での豊かな国民生活を学んでいく。単元の終末では、戦争という過去の出来事を教訓として、現在のアジアの国々と日本との関係について考えさせていく。戦争を経験していない世代だからこそできること。一人一人が根拠をもって表現できるようになることが平和への第一歩だと考えている。

4 本時について

(1) 本時の目標

・札幌市民の戦争体験談や札幌市平和バーチャル資料館を通して、戦争当時の子どもたちの暮らしについて調べたことを交流することで、子どもと戦争の関係について考えを深めることができる。

(2) 本時の展開 (6/12)

(思考・判断・表現)

【前時まで】

戦争が長引くことによって人々の暮らしが戦争一色へと変化し、日本全体が厳しい生活を強いられていったことを学んでいる。また、札幌市平和バーチャル資料館から当時の人々の生活について個々に調べてきている。

当時の子どもたちの暮らしの様子



戦争は、子どもたちの暮らしにどのような影響を与えたのだろうか？

学校は勉強するところなのに…

今の日常とは全く違う…

【勤労奉仕】

- ・農家や工場へ
- ・労働力として・援農

【訓練】

- ・人形を相手に・竹槍
- ・剣道・防空演習

【勉強】

- ・テストも宿題も戦争に関係
- ・ほとんど勉強しない

【衣食住】

- ・いつもお腹すいて・くつがすり減る・防空頭巾

【遊び】

- ・戦争ごっこ
- ・おもちゃも戦争に関係

【疎開】

- ・戦争の被害が少ない土地へ・親と離れ離れ

こんな生活は…
耐えられない！

でも

辛いと言うことさえできない。言うど「非国民」に…

手紙に辛いことを書くことさえも検閲されて許されない…

どうして、こんな辛い生活に耐えられたのだろうか？

これが当たり前だったから…

みんなが同じ思いをしていたから…

日本が勝って平和が訪れることを信じて…

硯光正さん

「物は何もありませんでした。そんな暮らしでも我慢するという心はありました。」

氏家清さん

自分だけではなく、誰もがそうだったのでみんな我慢できたのです。

当時小学5年生

当時中学生

負けた後は、絶望しかなかったのでは…？

勝つと信じていたのに負けてしまった…

自分なら我慢の限界になってしまう…

みんなが笑顔に！勉強をできる喜びを感じている！



青空教室(1945年9月頃)

戦争は子供の笑顔や日常を奪うつらいものだったんだ。

戦争は子どもの平和な日常を奪うもの

戦争は学校生活や平和な日常生活にまで大きな影響を与えた。辛い生活でも誰もがそうだったので耐えることができた。

札幌市平和バーチャル資料館の当時の様子のイメージ図を提示していくことで、生活経験とのずれから問題意識を醸成する。

・「学校生活」「日常生活」という側面から、子どもたちが交流したことを構造的に板書に価値付けていく。

・今と比較させることで、当時の生活の厳しさを自分事として考えさせていく。

・辛いことを言うことも書くこともできなかった事実を提示することで、当時の子どもたちの心情に迫らせる。

・戦争体験談の共通する言葉を通して、当時の子どもの厳しい暮らしを実感を伴って捉えさせる。

【視点2】

戦後の青空教室の写真を提示し、子どもの明るい表情を見ることで、戦争の悲惨さを実感させる。

評

戦争当時の子どもたちの暮らしについて多様な側面から見つめ、考えを深めることができたか。

5 実践のポイント

【成果】

- 「戦争はしてはだめ」「平和は大切」という平易な考え方から「戦争は人の心を支配するものだから2度と起こしてはならない」「戦争は当たり前を奪うものなので、平和な世の中を自分たちが維持していこう」という根拠をもった確かな見方・考え方へと高めていくことができた。
- 戦争を体験していない世代だからこそ、戦争の悲惨さを平和バーチャル資料館から体感することで、自分たちにできることを模索していこうという態度が育った。
- 平和バーチャル資料館の資料や戦争体験談を調べ学習や本時の資料として活用したことで、戦争時代の生活の様子や当時の被害の様子を実感的に捉えることができた。
- 戦争当時の子どもたちの様子に焦点を当てて本時を行った。学校生活と日常生活の2つの側面と比較しながら多面的に当時の子供たちの様子を捉えることができた。「自分だったら我慢できない」「絶対に耐えられない」という自分事として考える子どもたちの姿が見られたことも成果であった。

【課題】

- 平和バーチャル資料館をどの程度単元の中で活用するかが課題である。調べ学習としてはとても効果的なのだが、本時で必ず活用するというよりは単元の中の調べ学習の時に活用するという方向性の方が子どもたちの思考に沿った展開を考えられるかもしれない。
- 資料の精選も課題である。とても貴重な価値のある資料が豊富に資料館に存在しているのでたくさん活用したいという思いが先行してしまった。その結果、その資料から子供たちの思いを引き出すことはできたが、言葉の深みを吟味することができなかった。「本当にそうなのか？」とお互いの考えをもっと吟味し合い、情的に戦争という社会的事象に迫るためには、資料の精選が必要だった。
- 1時間を通して目標に対する評価を具体的に子どもの姿でどう想定しておくかが大切であった。ノートや発言だけで見取ることも大切だが、最後の振り返りの場をしっかりと確保することも一つの手立てであった。「どんな姿で」「どんな発言で」「どんな振り返りで」というような具体的な想定と手だてを今後も考えていく必要がある。